

グローバル社会と見えざる力

西 本 昌 二

コロンブスの時代から始まったとされる“グローバル化”には多大な恩恵がある。発展途上国においても、教育、医療などの分野で進展がみられ、新たな仕事につき、所得が向上した人も多い。他方、“グローバル化”には、負の側面も多い。先進国の文化や価値観が世界的な規範を支配し、多くの国で古き良き伝統のもとの精神的な安定は失われつつある。

日本でも経済的観点から、“グローバル化”に乗り遅れるな、とか、“ガラパゴス化”した日本を建て直す、など言われている。大学教育の中では、海外留学の奨励、外国語習得がさらに重要視されている。

私は44年前大学卒業後、数か月の就職経験を後に、海外に飛び出した一人だ。主な理由は、国際的な職場で自己を発揮したい、という願望が強かったからだ。私にとって職業とは、自己成長、鍛錬の場であると同時に自分の信じる価値観を実践する機会と信じていた。

あれから38年ほど、国連開発計画（UNDP）など4つの国際機関で社会インフラ整備、能力開発などの支援活動に従事した。はたして、私の初心は実現され、満足な成果を上げられたのかは、わからない。一つ確信をもって言えることは、優秀な人と一緒に働けば、謙譲の大切さがわかり、自分の非力を改善したいと思うし、大組織を動かすのも一人ひとりの力の結合ということだ。

本学で教職について、スクールモットーの、“Mastery for Service”を考えると、私の過去のいわゆる“グローバル”な仕事をするにあたって私を導いてくれた理念、見えざる力、があった、と強く感じる。

人間は生物の一つである以上、本来自己中心なものだ。しかし、他の動物と違って人間の行動には、他利的、“全体のためには自分を犠牲にする”という部分も多々ある。そこには、利己的な考えをコントロールして、真、善、美、愛に近づき、それを実践するよう努力したい、という願望がある。関学のスクールモットーはそれを励ますメッセージなのだ。真、善、美、愛はすなわち、我々の能力を超えた力、すなわち、“神”の望むものなのだ。この理念は時代や場所を超えて、普遍的に存在すると思う。

関学は建学125周年を迎え、その創立者の望み、ビジョンを大切に思い出し、考えることが必要だ。これを我々がよく理解し、内部化し、日々の生活の糧とするとき、“グローバル”な世界で自分は如何に生きるのか？という問いに、答えがおのずと見えてくるものと確信する。

（総合政策学部教授）